テキスト
モラロジー概論ダイジェスト
（青年部オリジナル集中学習用資料）

1日で学べる

第１章 倫理道徳がめざすもの

１．モラロジーとは

モラロジーは、倫理道徳の研究とその実践にもとづいて、人類の生存、発達、安心、平和、幸福の実現をめざす「総合人間学」で法学博士廣池千九郎が創建しました。

モラロジーは、道徳を表すラテン語のモーレスと学を表すギリシャ語のロギアをもとにつくった新しい学術語で、日本語では道徳科学といいます。

モラロジーの中心課題は、普通道徳（社会において一般に倫理道徳と考えられているもの）と最高道徳（古代の諸聖人が実行した道徳）の原理・内容・実行の方法を比較研究し、道徳実行の効果を学問的に明らかにすることです。最高道徳は、実行者自身にも、相手にも、また第三者にもよい結果をもたらすことを明らかにして、人類に対して最高道徳の実行を推奨することを目的としています。

２．安心と秩序をもたらす倫理道徳

倫理道徳は個人的側面と歴史・社会的側面の２つの面から考えることができます。

個人の生活面から見ると倫理道徳は、人と人との心を結びつけ、一体感をもたらすうえで大切な役割を担っています。生きがいや希望、喜びや安心につながるものです。個人が幸福で充実した人生を送るために、根本的に重要なものです。

歴史的・社会的側面から見ると倫理道徳は、法律と同様に社会生活の基盤として、健全な社会の維持、発展に欠かすことのできないものです。人類は、家庭、国や民族などをはじめ、さまざまな共同体や社会集団を形成し、秩序と統一、調和を保ち、安定して運営されるためのルールとして倫理道徳を発展させ、安心な生活を送ることができるようにしてきました。

以上のように、両面において、倫理道徳の果たす役割は非常に重要であり、人々の心に安心を生み、たがいの信頼を高め、社会の秩序をもたらします。

人間どうしの信頼を生み、個人に安心を与え、社会に発展をもたらすものが倫理道徳なのです。

３．倫理道徳の本質と善の実現

私たちは、だれもが幸福な人生を送りたいと願い、その実現に向けて日々努力を積み重ねています。倫理道徳とは、悪事を避け、善事を行なうことです。

その善悪の基準は、自分と他者を含めた人間の幸福実現につながるか否かによって定められます。「善」を志向する倫理道徳の本質は、自他の幸せと社会の発展を願って、その実現に努力する心づかいと行いであるといえます。

私たちの人生は、家庭、職場、地域社会や国家の働きによって支えられています。各自の幸福や生きがいなどの私的な善を実現するためには、社会全体を維持発展させる「公共善」を整える必要があります。

私たちの生命（いのち）とその存続は、人類の安心、平和、幸福の実現のための根本であり、「善の最大価値」といってよいでしょう。現代においてもなお、多くの人々の生命が軽んじられ、危険にさらされています。国際連合は、こうした状況の解決をめざして「人間の安全保障」という理念を打ち出しました。

また、現代は、ともに生きるという「共生」の考え方が重要な意味を持つ時代です。地球環境の悪化により多くの生命体が絶滅の危機に直面し、人類の存続すらも危うい状況の中で、「持続的発展」という概念が採択されました。

これからの生き方には、こうした人類共通の理想の実現をめざす、地球的な広がりを持った公共精神が求められているのです。

以降は、生命を人類社会で培われてきた精神や文化などを内包するものとして「いのち」と表記します。

人類社会が、善を実現していく過程は、①善の継承、②善の発展、③善の譲渡の３段階から成り立っています。

①善の継承：私たちは、祖先、社会、そして宇宙自然から、いのちの存続と発展のために欠かすことのできない大きな恵みを受けています。そのいのちの中に、家族や社会の先人たちが積み重ねてきた文明と文化を受け継いでいます。

②善の発展：私たちに与えられたさまざまな善の恵みは、幸福を築くための資源です。それを大切にし、新しく創造的要素を加えて人間が利用可能なもの、より価値のあるものにしていくことが善を育てる活動です。

③善の譲渡：同世代の人々に分かち与え、次の世代へ譲り渡していくことです。私たちが善を育てる努力を怠れば、次の世代に譲る精神的・文化的資産が失われることになります。

人類の歴史は、こうした３段階の途切れのない循環で成り立っており、現在世代の私たちは、いのちの連続性の中に生きています。今後の倫理道徳は、この世代間での善の継承・発展・譲渡という視点が強く求められます。

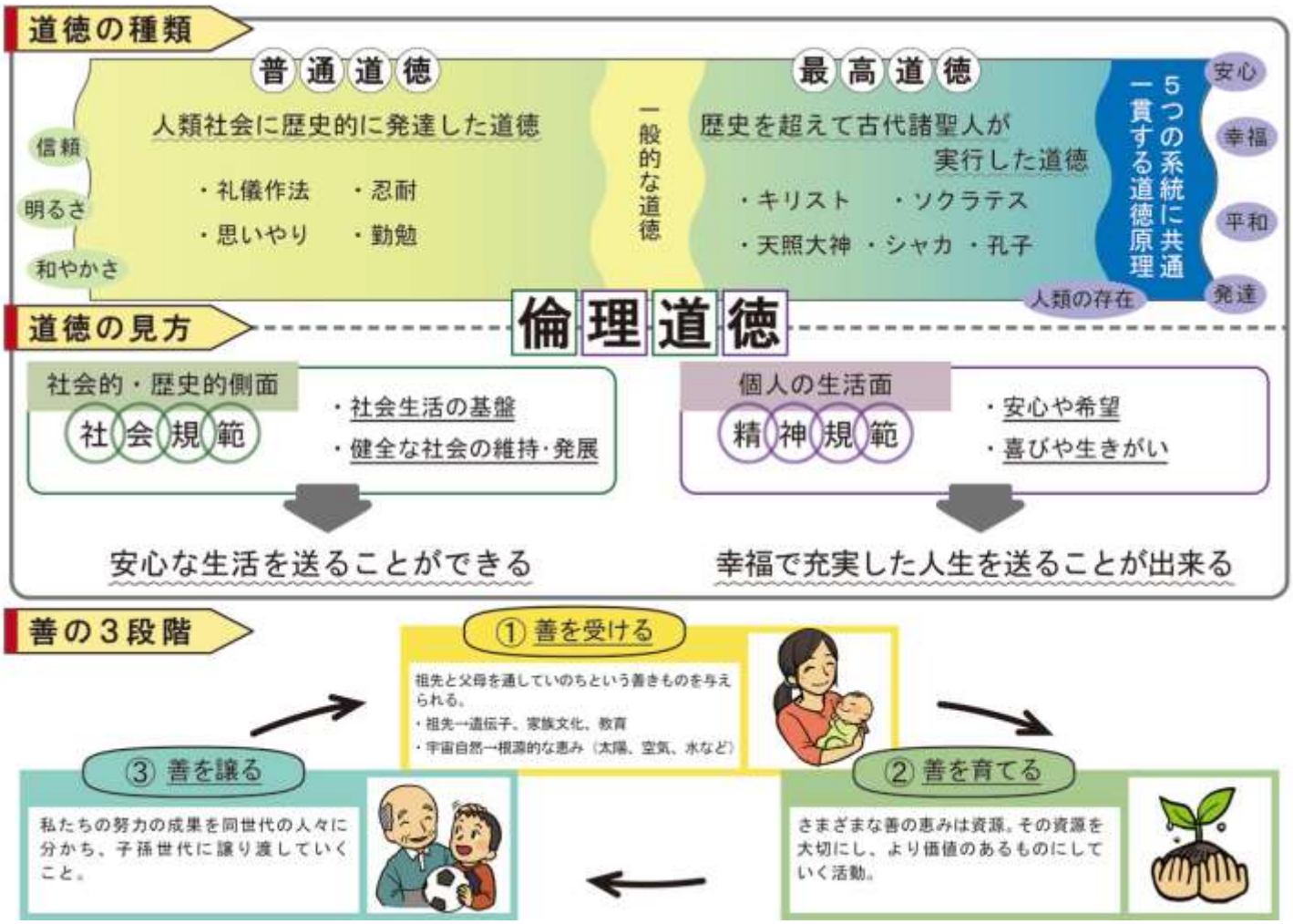
４．幸福の実現と人間の精神

いのちという善を維持発展させていくためには、いくつもの課題があります。人類は、その課題を解決するために、時代や文化に即して、つねに正義と愛の観念を発達させ、それにもとづいて法律や制度をつくり上げてきました。

一人ひとりの生活を向上させ、運命を切り開いていくのは精神の力であり、正義や愛、相互依存・相互扶助の精神や個人の自助努力の精神もすべて人間の精神が生み出した倫理道徳の重要な要素です。

私たち一人ひとりの道徳的精神が、自分自身を幸福へと導き、社会全体を発展させる基礎となります。

総合人間学モラロジーは、人間の道徳精神を高めることの重要性を喚起し、その具体的方法を提示する学問です。



第２章　幸福をもたらす品性

１．幸福の実現と生きる意味の探求

私たちは、幸福な人生を求めて、日々の生活の中で、さまざまな欲求を満たしながら生きています。この欲求は、いのちを全うするために、私たちを一定の行動へと駆り立てる原動力です。心理学者のアブラハム・マズローは、人間の欲求について、５つの階層から（①生理的欲求、②安全の欲求、③所属と愛の欲求、④承認の欲求、⑤自己実現の欲求）なるとし、基本的な欲求が満たされると、私たちの関心はより高次の欲求に向けられると説明しています。

この高次の欲求に向かう傾向は、自分の生きる意味を求めていく動きともいえます。精神医学者ヴィクトール･フランクルは、人間が人生の意味を見いだす場面として３つ（①新たな物事の創造、②出会いやつながりの発見、③苦悩の意味の変容）をあげています。

私たちはこうした体験を通して新たに生きる意味や価値を見出し、いっそう精神的に成長し成熟していくのです。

人生とは、欲求を満たしながら、同時に生きる意味を獲得していく旅であり、自分自身の固有の物語を紡ぐ旅であるといえます。人間は生きる意味を見失うと、努力する力が弱まり、絶望し、虚無感にとらわれます。苦難に出遭っても、（廣池千九郎の事例のように）そこに確かな意味を見いだすことができれば、悲観し絶望することはなく、生きがいを持って力強く生きることができます。

２．人生に影響を与えるもの

私たちの人生は、大きく分けて、遺伝、環境、自分自身の心づかいと行いから成り立っています。それをもとにして自分の人生をどう紡いでいくのか、それが私たちに課せられた人生上の課題です。

（１）遺　伝　－　私たちは、だれもが両親を通じて祖先から遺伝子を受け継いで生きています。遺伝子は、いのちが発現するうえできわめて重要なものであり、両親を通じて一人ひとりに与えられた宇宙自然からの恵みであり、かけがえのない財産です。

（２）環　境　－　私たちは、環境(自然環境と社会環境)の影響を受けて成長していきます。特に家庭環境は強く影響を受け、家庭内の教育やしつけ、また家族とその知人や友人との交流を通じて、世代を超えて継承してきた知恵や文化を、知らず知らずのうちに受け継いでいます。

（３）心づかいと行い　－　人間は、遺伝や環境の影響を受けとめるだけの存在ではなく、自由意思を持って考え、行動することができる自律的な存在です。日々の生活の中での心づかいと行いの積み重ねによって、しだいに人格、品性を形成していきます。道徳的な心づかいと行いが私たちの品性を向上させ、新しい人生を切り拓く根本的な力となります。

３．品性 ― 善を生む根本

一般に、品性とは、すぐれた道徳性を意味し、道徳の実行を積み重ねることによって身につけた人柄をさします。品性は、人間の知情意をはじめ、心身の諸機能やその働きを統合するもので、人間の知識や能力や行為を、幸福実現のために有効に活用していく精神的な力であり、人間の生きる力の核心をなしているものです。

品性は、私たちの「よりよく生きるための力」を発揮させます。
その**第１は、「つくる力」**すなわち、創造力です。与えられた能力をよく生かし、日々の仕事に励み、課題を解決する意思や知恵を生み、人生を開拓する力です。

第２は「つながる力」すなわち自然や他者と共生する力、人間関係をつくる力です。自然や神仏など、人間をこえた存在と心をつなぐとともに、人を思いやり、人と親密に交わり、さらに人々と協力して集団の機能を強化する力です。

第３は「もちこたえる力」であり、困難や危機に対処する力です。人生の途上でさまざまな出来事に直面する課題や危機に際しても、粘り強く対応することで、自己の持っている力を十分に発揮することができます。

人間は、善を志向する意思を持ちつつも、誘惑や欲望に負けて世の悪に染まることや、社会的地位や権力を得て活躍するうちに、それらを乱用し、法律違反を犯すことがあります。能力や地位、権力などを正しく生かすためには、それにふさわしい高い品性が必要なのです。

モラロジーでは、道徳的な心づかいと行いを積み重ねていくことが品性向上の道であり、また、この品性の向上に従って人間の幸福が実現する、という因果関係を明らかにしています。直接に幸福を実現しようとするのではなく、まず品性の向上に励むことによって、おのずから幸福な人生を歩むことができるという考え方です。

４．人生の時期と品性の向上

私たちの人生は、品性を向上させる努力を積み重ね、人間としての成熟を図る長い旅路であるといえます。

私たちが幸福を実現していくには、それぞれの時期の発達課題（①乳幼児期、②児童期、③青年期、④成人期、⑤高齢期）について理解し、生涯にわたって品性を向上させるための生涯学習を必要とします。

さらに、次世代の幸福を願い、人類の持続的な発展に参画していくためには、累代教育が必要です。これは、親から子、子から孫へと世代を重ねて、人間の道徳的能力を高めていくことです。

私たちは、この累代教育によって、未来世代の道徳的潜在力を高め、安心と生きがいと希望のある人生を築き、平和で発展的な社会づくりを継続することができるのです。①乳幼児期は、基本的欲求を満たしながら生活習慣を身につける時期です。②児童期は、育まれた信頼感と自律感の上に、自発性と活動性を身につける時期です。③青年期は、自己中心性を離れて、他人への共感や相互扶助、社会的連帯という視点に立って自己の確立を図る時期です。④成人期は、子供をはじめ次の世代を育成し、地域共同体や国家社会に貢献すること、自己の人生を豊かにし、他者の保護と育成に努める時期です。⑤高齢期は、感謝と宇宙自然との一体感に包まれる深い安心と幸福感にもとづいて、いのちの存続と発展を願い、子孫や次世代の育成という最大の善の活動にエネルギーを集中させる時期です。

与えられた自分のいのちを全うし、次世代に伝えるという大きな使命に取り組むことが究極の自己実現であり、品性の完成に近づく姿といえるでしょう。

第３章　道徳共同体をつくる

１．個人と社会

私たちは、みずからの幸福の実現を求めて生きていますが、個々人の生活や幸福は、家庭や職場、地域社会や国家などの共同体の働きによって支えられています。

私たちの社会は、自立と連帯の調和の上に成り立っています。社会が健全に機能するためには、一人ひとりが、自立的に生きることが必要です。しかし、これは、他者から切り離されて孤立することを意味するのではなく、真の自立とは、むしろ他者との緊密な関係相互依存・相互扶助の関係を築いていくことの中に生まれてくるものです。

人間は本質的に、他の人々に支えられなければ生きられない存在です。家族をはじめとして友人や仲間、隣人、さらには異文化の人々とも心を通わせ、たがいに敬意を持って助け合い、連帯することが、人間として生きるための基本です。

このような自立と連帯の調和を実現していくのは、自助・共助・公助の行動です。個人ができないことは家庭や家族が、それらができないことは他の組織や地域共同体が、それらができないことは国家共同体が受け持つという形で相互扶助が存在し、それぞれが調和することによって住みやすい安心な社会がつくられるのです。

２．人類の共生と公共精神

人類が経験してきたさまざまな争いの根本要因は、私的な欲望や集団的な欲望の追求を放任してきことにあります。この際限のない欲望から抜け出るために、昔から「相手の立場に立つこと」が教えられてきました。

現代の私たちが大切にすべき道徳は、「三方よし」と呼ばれ、社会生活のさまざまな場面で共生を進めていくための基本となる考え方です。

現代社会を構成する基本理念は、個人主義、自由主義、民主主義であり、この３つの理念が不可分に組み合わさっています。

民主主義は、人はだれもが自由であり、平等な価値を持っているという人間観を基礎とした思想であり、それにもとづく社会の制度をさします。民主主義の理念とその実現に努力してきた人類の歴史は貴重ですが、ときに利害や衝突や感情的対立などにより、機能不全に陥ってしまう場面があります。

人類の歴史的経験から見て、社会の制度には完璧なものは存在せず、どのような社会制度も、それを利用する人々の道徳性、すなわち品性のいかんによって、うまく機能するかどうか決まります。

どのような共同体も、固有の道徳的価値を共有しており、それを過去から現在へと受け継ぎ、さらには未来へと受け渡していきます。国においては、歴史を積み重ねる中で、それぞれの国に固有の伝統文化と国民精神を形成しています。

国や民族の固有の文化は、倫理道徳に対する考え方にも影響し、国民の精神に生命力を与え、国の発展の基盤となります。もしも社会が過去の歴史や文化を断絶するならば、みずから発展する原動力を失い、国民が伝統文化と国民精神を疎かにするならば、自国に対する帰属意識と誇りを失うことになります。

３．人類社会の基礎的共同体

家族は、人類社会のもっとも基礎的な共同体です。家族が集う家庭は、いのちの継承を実現していく場であり、子供を社会の役に立つ人間へと育成する重要な場です。

世代を超えて家族文化を継承し、健全な家庭をつくることによって、道徳性豊かな子供が育ち、安心と喜びのある人生を築くことができます。

「孝は百行の本」といわれるように、親祖先への孝行は、世界宗教にいう隣人愛や慈悲の根源となるものです。

人間の成長は、生まれ育ったふるさと、すなわち地域共同体の文化と深く関わっています。ところが現在の日本では、人と人との親密なつながりが断ち切られ、顔見知りの人が減り、朝夕のあいさつもない生活を送る人も少なくありません。

みなが自分の世界に閉じこもって生きているような状況が出現しています。地域共同体におけるきずなと郷土愛を育てるには、住民一人ひとりの主体的な取り組みが必要です。

私たちの生活は、国家の働きに支えられて成り立っています。国家はすべての集団や組織を包み込む包括的な共同体であり、歴史と文化を共有する精神共同体です。国家のもっとも重要な役割は、国民の幸福の基礎を確保すること、すなわち国民の生命・財産・自由を保護することです。国民は、国家の恩恵に感謝するとともに、「国家があなたがたのため何ができるかを問うのではなく、あなたが国家のために何ができるか問うてほしい」というように、それぞれが国家共同体の維持と発展に向けて努力することが求められます。

４．愛国心と人類愛

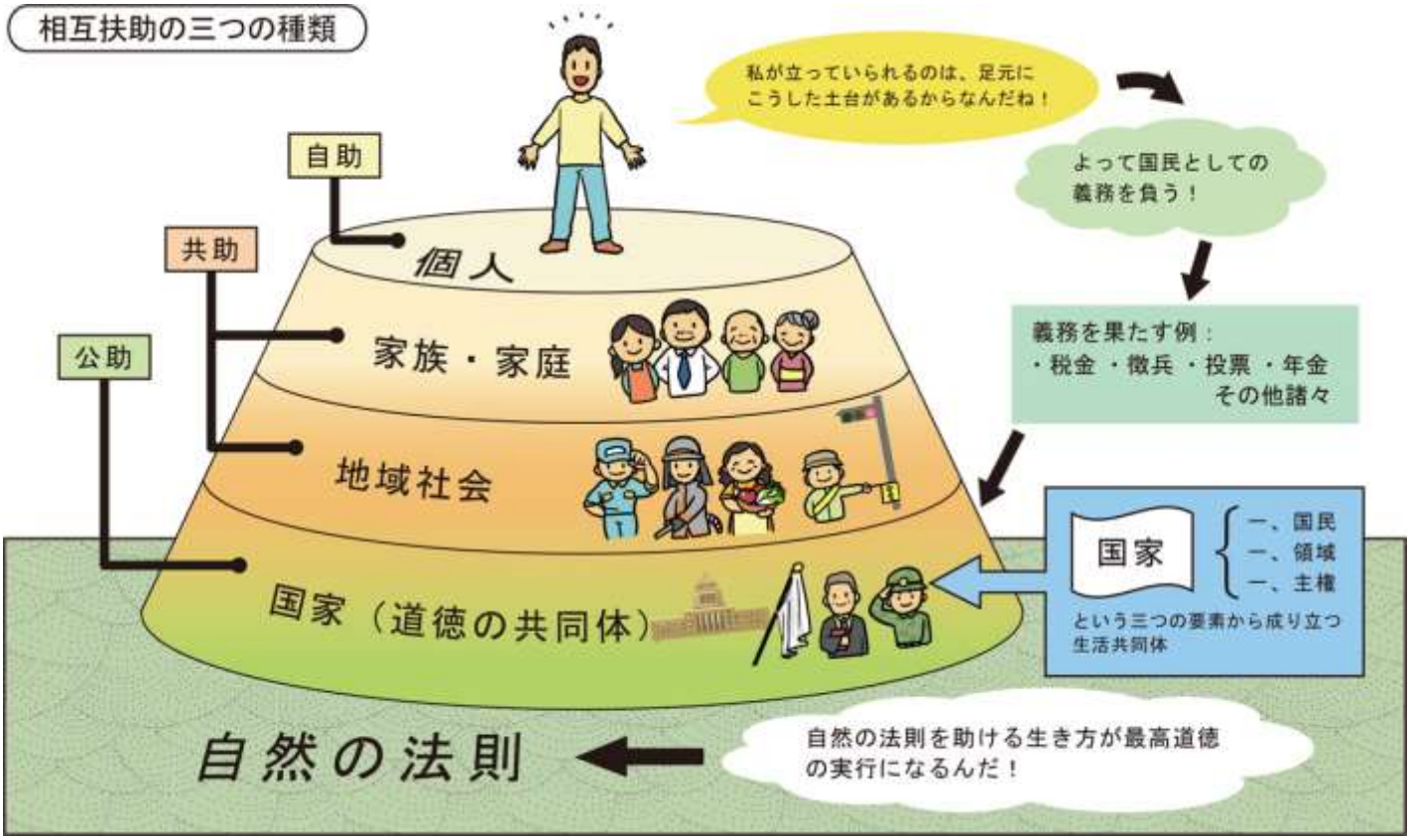
国家が十分にその機能を果たすためには、国民の統合が必要であり、それには国民の精神的なつながりが重要な役割を果たします。祖国愛あるいは愛国心は、自国の歴史、そして文化を誇りに思う心から生まれ、国民としてのアイデンティティーの基盤となります。

愛国心は祖国の発展に貢献する原動力となり、もしも祖国が外的から侵略されたときには、自国を守るために立ち上がる勇気を与えます。

国家の存続と国民の安全のために、みずからのいのちを捧げた人々は、国民全体にとっての恩人です。国家のために犠牲になった人々に誠を捧げる心を失えば、国民のきずなは弱まり、国家は内部から崩れていくことになるでしょう。

一方で、愛国心は強力な感情を伴うために、他国民の愛国心と衝突する危険性があります。他国民の祖国を愛する感情や文化の多様性を認め合い、「互敬の精神」を培って、地球規模での共生を実現していく努力が必要です。

グローバル化の進行する現在、各国はますます相互依存の関係を深めています。世界の国々と平和的に共存し、互いに協力し合って、地球規模での貧困や環境問題などの解決に尽力し、公共財としての地球環境を保全していくことが、人類共同体に対する貢献になります。



第４章　普通道徳から最高道徳へ

１．普通道徳の必要性と限界

普通道徳の多くは、社会生活を円滑に進めるために必要不可欠なもので、いつの時代にも尊重し守るべきものです。普通道徳は、信頼ある人間関係を築き、社会に秩序をもたらすうえで、法律と同様に欠くことのできない大切なものです。ところが、普通道徳を実行しても、必ずしもよい結果につながらず、かえって他者との関係を悪化させ、自分自身が苦しむことがあります。

廣池千九郎は、一般に行なわれている普通道徳の必要性は認めながら、その限界を乗り越えるために、諸聖人の教説と事績に由来する最高道徳を提示し、その実行が真の安心・平和・幸福の実現のために必要であることを示しました。

普通道徳の限界について見ていくと、普通道徳は、①一時的、感情的な道徳になりがち、②恩着せがましい要求的な道徳になりやすい、③形式的に流れ、冷たく知的になりがち、④物事に勤勉、熱心に取り組む中で、ときに度が過ぎて力以上に無理を重ね、過剰な功名心や自己顕示欲にかられて行きすぎた行動をとる場合があります。

普通道徳は、自己中心的な傾向を免れないことから、実行者自身に必ずしもよい結果をもたらさないのです。ここに限界があります。従来の普通道徳の形式や制度は尊重しながら、それを実行するときの精神をよりよいものに変えていくことが大切です。

２．求められる最高道徳

古代には、普通道徳とは異なる、すぐれた倫理道徳が生み出され、その系統は、宗教や思想という形で現在まで受け継がれてきています。

諸聖人は、日常生活での生き方の指針にとどまらず、魂の救いまで含めた「生きる意味」を人類に教え示しました。諸聖人が説いた宗教や道徳と同等のレベルのものは、いまだ現れていないといえるでしょう。

廣池千九郎は、このような諸聖人が示し、実行した質の高い倫理道徳を、学問的に再構成して、「最高道徳」と名づけました。

最高道徳は自己中心の傾向を超えた広い視野を持つ道徳です。

最高道徳の特質は、

①超越的な存在を認める（万物を生成化育するという自然の働きを、超越的存在の示す愛や仁、正義や慈悲の心ととらえて、これに従う生き方を人類の幸福実現の指針として説きました。）

②人心を救済する（ひたすら神仏の心を受け継ぎ、自己の利害を離れて、人間の精神の育成と魂の救済、すなわち人心の開発と救済のために一生を捧げました。）

③正義と平和を希求する（人類の平和を目的として、その実現に献身しました。）

④知徳一体を説く（知徳一体を説き、自然の法則に合致する正しい知識にもとづいて人間の精神を根本的に改め、品性を養うことを重視しました。）

⑤人間の弱さを慈しむ（生老病死をめぐって苦しみ悩む人間の弱さを慈しむ心を教えています。）

日本文化と道徳系統の源泉をたどると、『古事記』や『日本書紀』などの神話や伝承の中に最高道徳の精神を見ることができます。そこに記された天照大神の物語には、その後の皇室と国民の精神の根幹となる「慈悲寛大自己反省」の精神が確認できます。

『古事記』の天の岩戸籠りの条に「天照大神、見畏みて」岩戸に籠ったとあります。大神は、高天原全体の統治の責任者として「見畏み」、つまり自分自身に徳の足りないことを深く反省し、いちだんと道徳的修養を積むために天の岩戸に籠ったというのです。

歴代の天皇は、この慈悲寛大と自己反省の精神を受け継ぎ、日本人の道徳精神の中心としての役割を果たしてきました。

日本人は、このような精神的基盤の上に、仏教や儒教などの外来のすぐれた考えを吸収し、独自の文化を発展させて国柄を形づくってきたといえましょう。

３．聖人の精神の継承と発展

諸聖人に始まる最高道徳の系統は、すぐれた人々によって継承され、展開されてきました。聖人については、しばしば「私たちとはかけ離れた特別な生活を送った人であり、その教えは理想的すぎて、結局、現実の世界では力を発揮できない」と理解される傾向があります。しかし、諸聖人ほど人々と苦しみをともにし、人間の幸福と救いの道を求めて悩み、考え抜いた人は存在しません。

諸聖人の教説は、宗教や学問という形で伝わり、受け取る人々により、また風土や文化によって独自の解釈が生まれ、分裂していきました。その過程で、たがいに他の信じる神を否定し軽蔑して、幾度となく宗教的な対立や争いを引き起こ

してきました。

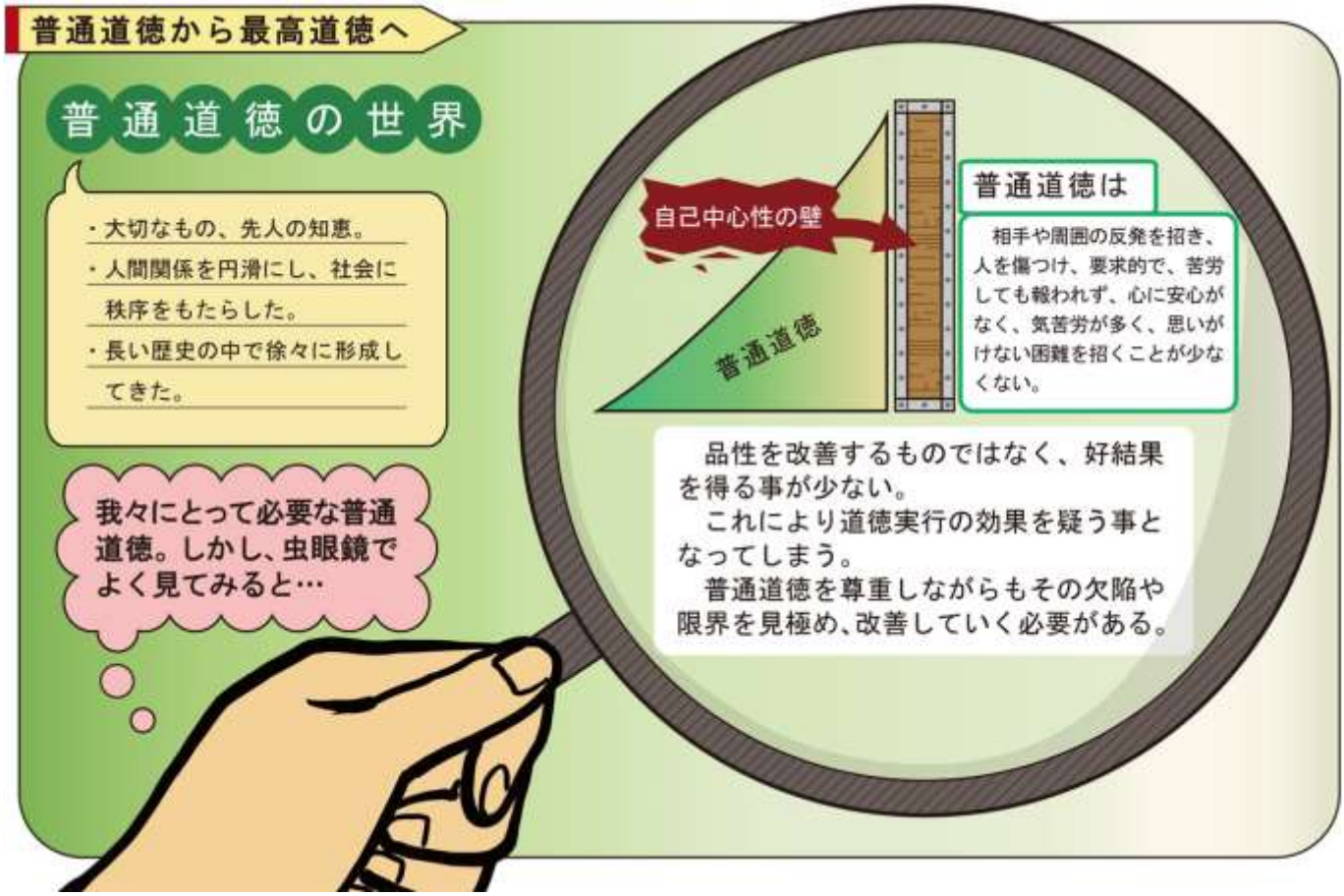
モラロジーは、諸聖人の示した最高道徳を固有の宗教や信仰の中にとどめることなく、その多様性のうちに共通性を探り、現代の諸科学の知見も採り入れて、倫理道徳に関する総合人間学を確立することをめざしています。

人類は、国家や民族の違いを認め合いながら、相互依存、相互扶助の世界をつくり出していかなければなりません。モラロジーは、こうした目的にそって、最高道徳をコモン・モラリティ（共通道徳）のモデルとして提示しようとするものです。

4．最高道徳への道

モラロジーの目的は、普通道徳と最高道徳の内容と実行の方法を比較研究し、あわせて道徳実行の効果を明らかにし、最高道徳の実行を奨励していくことにあります。ここまで、人類の歴史とともに形成されてきた普通道徳が、いかに重要であるかを考察してきました。また、そこには限界が現れていることも明らかになりました。その限界を乗り越えるために、普通道徳を改善していくこと、さらに最高道徳の理解と実行が不可欠であることを見てきました。

モラロジーでは、諸聖人の教説や多くの人類に共通する考え方にならい、私たち人間が宇宙自然の一部として生かされている存在であると考えます。そして、人間を超えた神仏の働きを助けるように努めることを、最高道徳の基本としています。



第５章　自我の没却

１．自我について

私たちが思考し、判断し、行動するには、まず「自己の確立」が必要であり、とくに青年期における心の成長や発達のために欠かせないものです。（第２章「幸福をもたらす品性」の青年期を参照）

人間の過度で偏狭な自己中心性のことを、モラロジーでは「自我」と呼びます。このような自我の働きは、古今東西、人間の平和と幸福を妨げる根本原因です。

自我は、さまざまな形で表れます。生理的欲求（食欲、性欲）や、社会的欲求（地位、名誉、財産などの獲得）は、適切な程度や範囲を超えた欲望となって表れます。また、だれしも他人のすぐれた能力、恵まれた境遇に対して、羨望や嫉妬を抱きがちです。それが高じて、相手を排斥し、他人の不幸を望むようになると、相手を傷つけるばかりか、自分をも損なう結果になります。

一方で、必要以上に自分を抑え込もうとすること、むやみにへりくだること、自暴自棄になることなども自我の表れです。自我はまた、集団的なものとしても表れます。

このような問題に共通しているのは、自分や自社、自国などの利害や関心事だけに集中して自己本位の言動を強めた結果、物事の全体を見つめることができず、他者を傷つけ、その幸福や権利を軽視あるいは無視する点にあります。

２．自我没却のめざすもの

自我を没却することは、単に個々の短所を抑えようとして、消極的な生き方をすることではありません。もちろん、それによって自分の意思や権利、人格が失われるわけでもありません。自我の没却とは、自分の持つ力を十分に生かしていくために、自己中心性の克服に努めることであり、自分の生き方を根本的に改善することです。

人間性心理学の研究においても、自己中心的な生き方を超えて自我没却することの重要性が示されています。人間は精神的に成長するにつれて、自己を超越して無私・無欲となり、普遍的なものに同化していくことが明らかになっています。

真に自己実現した人は、求めるよりも与えることに喜びを感じるのです。古来、宗教や教育、倫理道徳の中心課題は、人間の自己中心的な生き方を正す知恵や方法を教えることにありました。諸聖人の教えから、自我の没却に関するものを参照してみましょう。

『論語』では「意なく必なく固なく我なし」と述べています、釈迦は「煩悩を去り、涅槃に入る」ことを教えています。また、古代日本の道徳の中心であった清明心は、私心を去った純粋な心の表れです。禊や祓は、私心を去るために行われたものです。清明心は、皇室に連綿と伝わる公平無私の心、国民の幸福を願う心につながるものです。

このように聖人の教えに従って自己中心的な考えから離れ、他者や社会の幸福、安心を実現するために、自分の時間や経済力などを用いて積極的に貢献しようとする行き方へと転換すること、それが自我没却のめざすところです。

３．自我没却の方法

①自我の働きを自覚する

自我を没却するためにまず必要なことは、人間は自我にとらわれやすい不完全な存在であることを十分に自覚することです。対人関係でトラブルが起き、物事がうまく進まない場合には、まず自分の言動が自己中心的になっていないか振り返ってみる必要があります。

②視点を変える、視野を広げる

何らかの問題で他者と意見や立場が合わず、対立した場合には、一度、相手の視点に立ってその問題をとらえ直すことです。相手の立場になって物事を考えることで、問題解決の糸口が見えてきます。さらに第三者の視点に立って問題をとらえることです。

全体を見渡した公平な視点から状況や問題を見極めることで、その本質を的確に把握できるようになり、適切な行動へと導かれます。

視野を広げるためには、歴史に学ぶことも有効です。「歴史は鑑である」といわれるように、先人たちの経験は、よりよく生きるための知恵の宝庫です。

③慈悲の心を育てる

自我をなくすことに意識を集中し、過度に自己を抑制すると、自分の行動を萎縮させ、苦悩を深めてしまうことがあります。

このようなときは、発想を転換し、他人に対して優しさや深い思いやりの心を持って接するように努めるのです。すなわち慈悲の心を発揮しようとするとき、知らず知らずのうちに自我は薄らいでいきます。

いじめや差別の問題の本質も、私たちの意識や無意識にひそむ自我の働きです。偏見や差別の解消のためには、たがいの見方や感じ方、考え方、行動な

どの多様性を尊重する**「互敬の精神」**を培うことが肝要です。

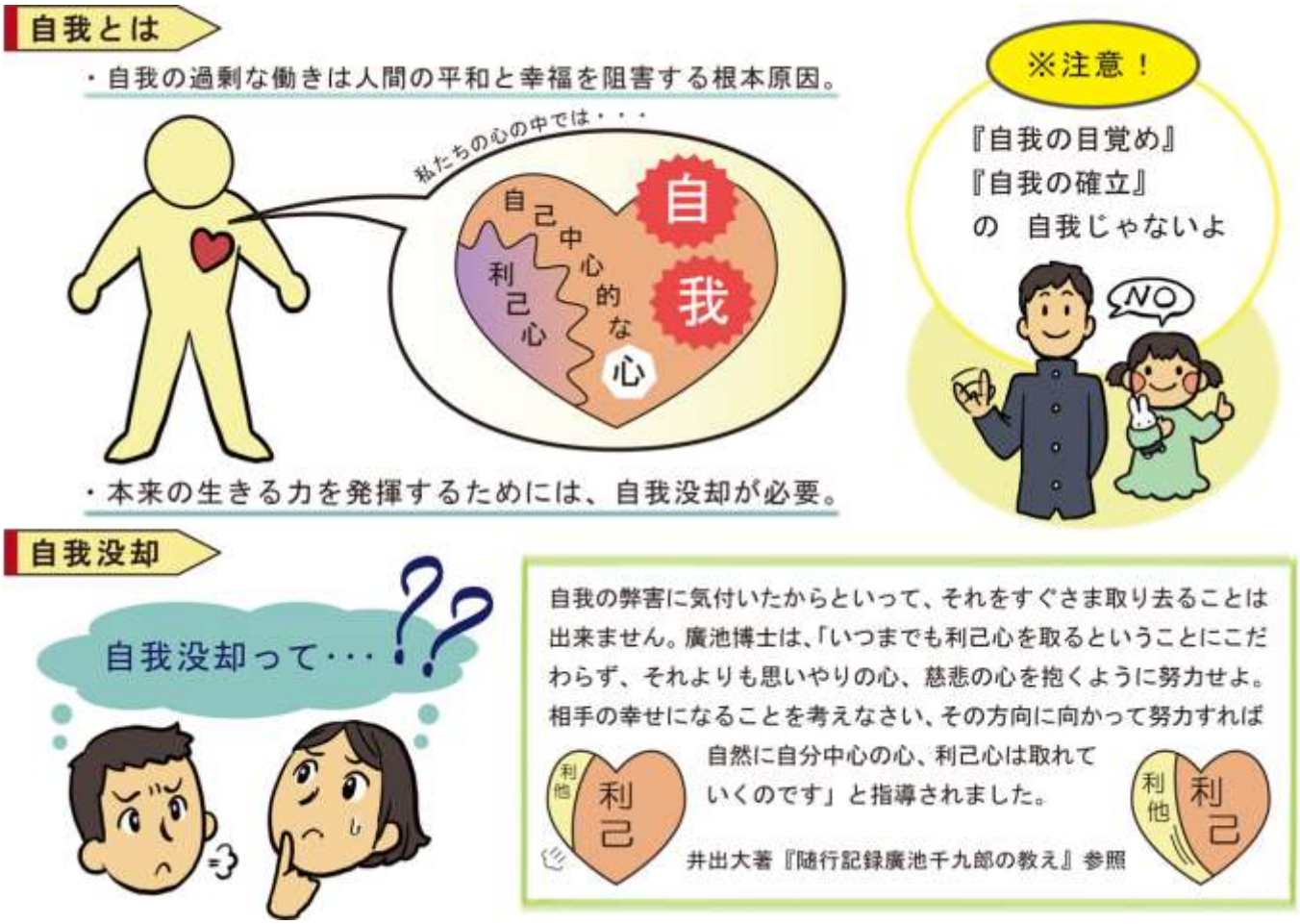
大切なことは、自分も他人もともに生かそうとする姿勢や態度です。この心がけが、品性を向上させることにつながります。

4．自我没却の意義

自我を没却すれば、自分の人生に新しい力と可能性を生み出すことができます（つくる力が発達）。また、自分が宇宙自然や社会から計り知れない恩恵を受けていることに気づき、深い感謝の念を持つと、自他の可能性を十分に開花させ、発展させる生き方をしようとする意欲が湧き出てきます。**「無我の心はじめてよく良果を生ず」**といえるでしょう。次に人間関係が改善され、新たな出会いに恵まれます（つながる力が向上）。さらに、どのような危機や苦難に直面しても、それに耐え、粘り強く努力することができます（もちこたえる力を培う）。

自己中心性から解き放たれた人は、自分の幸福の実現だけに終始するのではなく、常に相手と第三者の幸福の実現に向けて、みずから奉仕し、犠牲を払うことに努めます。究極的には、**「小我を棄てて大我に同化する」**ことにあります。宇宙自然の大なる働きに同化し、行動する方向へ転換するのです。

自我を没却すると何事にも建設的、発展的に取り組むようになり、自分の諸能力をよりよく発揮できるようになるのです。



第６章　正義と慈悲

１．正義の実現と課題

倫理道徳において、正義は社会生活における重要な徳目の一つとされてきました。何が正しくて、何が正しくないかは、私たちの生活や社会のあらゆる場面にかかわる問題です。人間は、古今東西を問わず、集団や社会を構築する中において正しいものを尊重し、かつ公正と公平を維持するように努めてきました。

私たちは自分が公平、平等に扱われているかどうかについて強い関心を持っており、自分の所有物や権利が不当に奪われることに対して強い怒りを覚えます。世界の諸聖人もまた、正義の重要性を訴えてきました。

現代社会においては、正義は、

①機会均等（法の下の平等の原則に従い、各人を平等に扱う）、

②分配の公平性（成果や責任の大小に応じて、正しく分配する）、

③不正に対する罰（他人の身体や所有物に対して危害を加え、社会の善を破壊する行為に対して、厳重に処罰するとともに、できるかぎり元の状況に回復させる）

という点が重要であると考えられています。

このように正義には、個人の生き方や社会生活において、調和や均衡、秩序と安心をもたらす重要な働きがあり、たがいがそれを守ることによって、安心して暮らすことができるのです。

しかし現実には、異なる立場の人によって主張される正義が、たがいに対立し、衝突することが多く見られます。それは、各自が主張する正義の中に、無意識のうちに利害や好悪などの感情が入り込んでくることが原因です。

人類の安心平和、幸福を実現するためには、独りよがりではない正義が求められるのです。

２．宇宙的正義の実現に向けて

従来の正義や公平性は普通道徳として必要不可欠ですが、その自己中心性のために不完全なものです。そこで、このような人間的正義を超える、より高い次元の正義が必要となります。それは宇宙自然の働きの中に見いだすことができるもので、**「宇宙的正義」**というべきものです。

歴史上、聖人と呼ばれて、人類の教師と称えられてきた人々は、このような宇宙自然の偉大な働きを真摯に学び、人間が生存し、発達するための道を明らかにしてきました。人類は聖人の教えによって、このような宇宙自然の働きの中に人知を超えた偉大な存在を認め、それを神または仏として崇めてきました。

私たち一人ひとりも、自然の働きの中に「生かされている」存在であることを自覚し、諸聖人がみずから実行して示したように、全体の調和と発展をめざす宇宙的正義の実現に向けて努力していくことが求められます。

3．正義を実現するための慈悲

諸聖人は、正義を実現するには慈しみの心が不可欠であることを力説しました。

釈迦の説いた慈悲、孔子の仁、イエスの愛は、究極的には共通し、いずれも「一視同仁」の精神を表しています。『概論』では、これらを総称して**「慈悲」**と表現します。慈悲とは、人類の利己的で偏った愛を超えた、あらゆるものを公平に慈しむ精神であった、万物を生成化育する神仏の心を意味しています。

最高道徳では、正義を実現する方法として、慈悲の精神を用います。「破邪顕正」の心ではなく、具体的には「邪を破らずして誠意を移し植う」の精神に基づき慈悲、至誠心を発揮して相手の真心や道徳心を引き出すために粘り強く接することです。

慈悲精神を発揮する対象は、大きく分けて、次の４つがあります。

①他者に対する慈悲（相手を愛し尊重して、成長と幸せを祈ること）

②共同体に対する慈悲（自分の属する共同体の恩恵に感謝し、愛すること）

③自然界に対する慈悲（すべてのいのちが生存し、持続的発展を遂げていくこと）

④自分自身に対する慈悲（宇宙自然の一員として、自分を愛し、大切にすること）

次に、慈悲の心の具体的なあり方について見てみると、次のような心があります。

① **公平と平等の心**（慈悲は、正義に基づいて公平に人間を愛すること）

② **人を育てあげる親心**（人の成長を見守り、育てあげるように尽力する心）

③ **恩人に対する感謝報恩の心**（私たちのいのちや生活を根底から支えてくれる人々の恩恵に感謝し、その苦労を推し量り、その恩に報いようと心がけること）

④ **人間の弱さに寄り添うケアの心**（ケアの心とはあたたかいいたわりの心、共感する心）

⑤ **建設的な心**（建設的とは、物事の成就を願って努力すること）

⑥ **物事を独占しない心**（正義の標準に従って、すべての人が自分の可能性を生かし、与えられた能力を発揮するように配慮します）

⑦ **自分の苦労の成果を分け合う心**（最高道徳では、みずから苦労して得た成果を他人や社会と分け合うことで、自分や他人のいのちの価値を最大限に生かし合います）

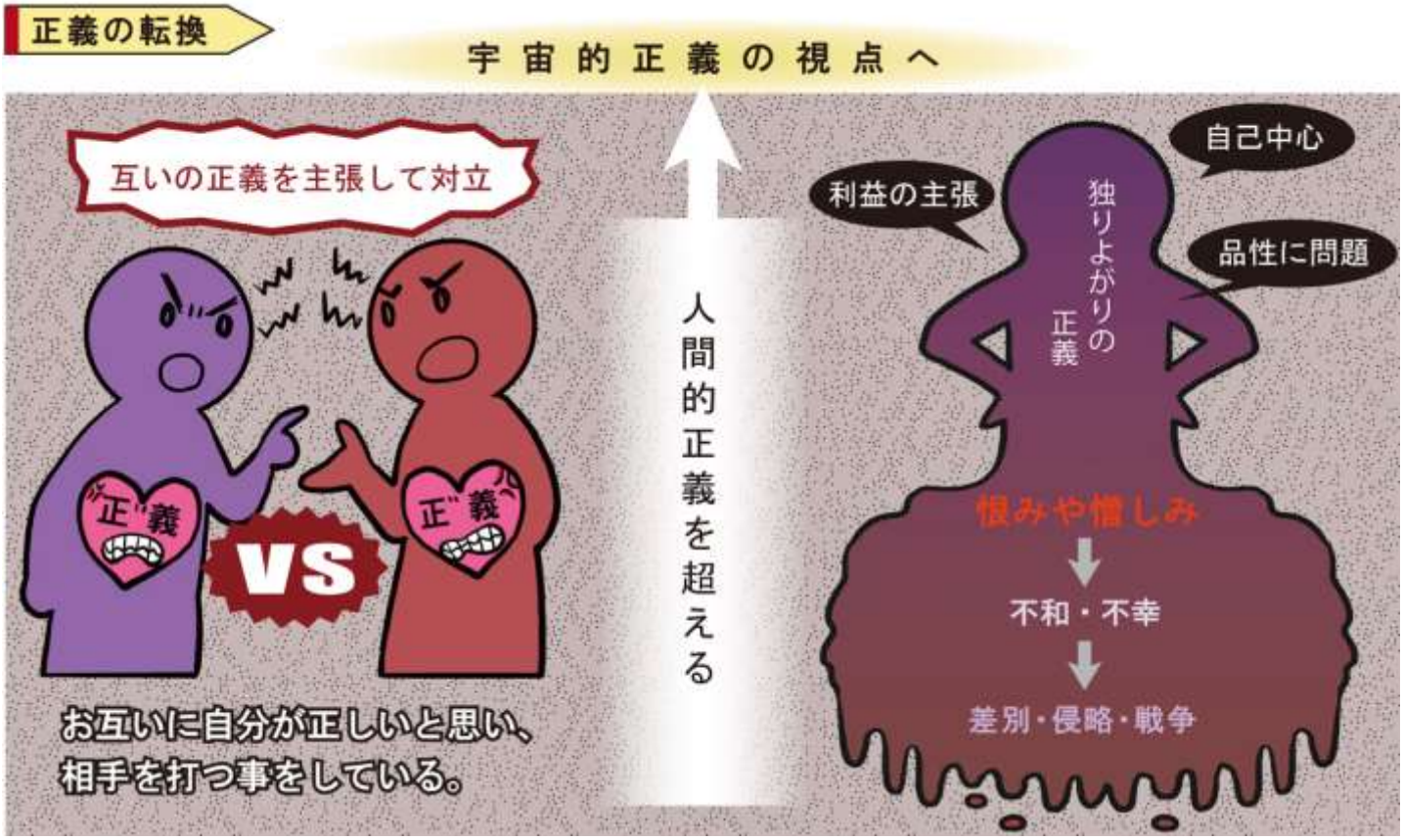
⑧ **つねに自己に反省する心**（自己反省には無用な争いを防ぐ効果があります。人間は不完全な存在です。事態の改善に向けて一歩を踏み出す積極的な心づかいです）

4．慈悲実現の意義

最高道徳の精神は、ひと言で表すと**「慈悲寛大自己反省」**です。慈悲は、万物を慈しみ育て、人間の安心、平和、幸福を増進する心であり、寛大は、人間のさまざまな個性を尊重し、多様性を認めて、その資質を磨き生かす心です。

自己反省は、絶えず自分の精神と行為について、宇宙自然の働きに照らし合わせて謙虚に反省する心です。

正義を含んだ慈悲は、平和と幸福を生むための叡智と行動力を育みます。正義と慈悲の関係を理解し、すべてのいのちの調和と発展を願う人が増えれば、その人自身が幸福に近づいていくことはもちろん、人類全体としても、平和と安心に向けて確実に前進していきます。



第７章　義務の先行

１．権利の尊重と義務

元来、人権の尊重や擁護の精神は、近代の西洋で発達した人間尊重の精神、すなわち自由・平等・博愛の思想に根差すもので、政治的な抑圧や差別をなくそうという願望から生まれてきたものです。しかし、人間の社会はつねに不完全であり、日本社会においても個人や集団による多くのいじめや差別、児童や高齢者に対する虐待や配偶者に対する暴力、インターネットを悪用した人権侵害などが存在します。

民主主義社会においては、基本的人権を国民に保障することは国の責務であり、他者の人権を尊重することは国民全体が負う責任であるといえます。自分の権利を行使するに際しては、他者の権利や公共の福祉に対する配慮が必要です。義務と責任について正しい認識を持って自己の権利を正しく行使することが、私たち一人ひとりに求められるのです。

私たちが幸せに生きるための権利を得るには、義務の遂行が必要不可欠です。このことについて、道徳的な視点から見てみましょう。

①権利と義務は表裏一体

いのちの出発点から考えると、人間のいのちは母親の妊娠のときから親世代の義務遂行に支えられています。

生活する権利は、仕事を通じて報酬を得るという具体的な義務の遂行によって実現します。自分の権利を追求する場合は、他者の権利との調整が求められます。

さらに、社会の一員として仕事や納税、政治参加などを通して、公共の福祉という善を維持発展させていく義務を負っています。

このように、本来、権利と義務は表裏一体の関係にあり、私たちが幸福を実現するには、その前提として、まず必要な義務を果たすことが求められます。

②個人および社会が負う義務

人類の存続や発展という視点から考えると、私たち人間が自他のいのちを生かすことは、宇宙自然や神仏、そして人類社会からの期待や負託に応えていくことを意味します。

義務とは、責任ともいいますが、その期待に応答することが私たちの基本的な義務です。

各自の幸福の実現は基本的権利であるとともに、基本的義務であると考えることが大切です。義務を従事するのは、人間の基本的人権を、より完全かつ調和的に実現する道を探求することです。

２．道徳としての義務先行

私たちには、法律上の義務を超えて道徳上の義務があります。モラロジーでいう道徳上の義務とは、人類の生存、発達、安心、平和、幸福を実現するための最高道徳的責務を意味するものです。

義務先行には**「贖罪」**と**「積善」**という二つの側面があります。

第１は贖罪の側面です。本来、宇宙にも、その構成員である人間自身にも、幸福を生み出すための潜在的な善の要素が満ちています。しかし、私たち個人も社会も、それらを十分に生かさず、むやみやたらに利用し、壊してしまうことがあります。古来、先人たちは、それを「罪」と呼んできました。

私たちは、つねに自分にとって損か得か、好きか嫌いかというような利害や感情によって、知らず知らずのうちに人の心を傷つけたり、心の中で責めたり非難したりすることがあります。これは「道徳的過失」を犯しているといえます。

また、私たちには「道徳的な負債」があります。これはこれまでにいただいた親による扶育の犠牲をはじめ、限りない先人や自然から受けてきた恩恵のことです。したがって、善を破壊するような働きを正す必要があり、これが贖罪としての義務先行です。

第２は積善の側面です。義務を果たすことには、人間の過失や負債を償っていくという側面だけではなく、義務を積極的に先行することで善を増加させるという側面があります。積善としての義務先行は、宇宙自然および人類の歴史的な営みから無数の善の遺産を享受していることに気づき、篤い感謝の念を持つことから始まります。

３．義務先行の方法

①期待や要請に応える

義務先行を日常の中で実行していくには、まず、私たちの考え方を根本的に転換する必要があります。生きるということは、天地自然からの恵みに応え、社会からの期待に応えていくことです。私たちには、周囲の人々の求めに応答しながら、幸福実現のために努力する責任があります。このように考え方を変えること自体が義務先行の第一歩といえます。

義務先行の基本は、**「労をも資をも神に捧げて施恩を思わず」**の精神で生きることです。

②自分の本分を果たす

義務先行とは、自己の品性の向上をめざして幸福の実現への道を歩むという考え方です。

私たちは、自分自身の人生を全うするためにも、自分の本分、つまり現在の職務や学業、家事などに励む必要があります。自己の務めに励むことは、自分ばかりでなく、必ず他の人の幸福につながっています。

③社会環境を改善する

社会には、さまざまな事情によって不遇な人生を余儀なくされている人々がいます。その人たちに対しては、苦しみに寄り添うケアの心で、自立できるように支援する必要があります。その苦難や不運が人為的・社会的要因によるものである場合には、そうした要因を改善しようとすることが重要です。

このように公私両面から社会環境の改善に取り組むことは、積極的に社会全体の善を増進する行為です。

自他の幸福を願って、家庭や職場の環境、社会の制度や風土などの改善を率先して心がけることが、義務先行の具体的な実行になります。

4．義務先行の意義

義務先行の精神を涵養していくことによって、私たちは自他の幸福や社会の発展に貢献しようとする意欲を高め、積極的に善の増進を図ることができるようになります。この義務先行の精神は、道徳実行の基本的な動機となり、さらに他からの感謝や見返りを求めずに実行を継続する力となります。

義務先行は、神仏と共に歩むという安心の境地を開きます。すべては天地自然の力、すなわち神仏の力によるものであるという謙虚な精神を培うことで、よりよい人生を開拓する底力がついて、確かな生き方や人生観を確立することができるのです。このような義務先行を継続することで、やがて自己および子孫の運命まで変えていくことができます。

第８章　伝統報恩

１．大きな恩恵への気づき

モラロジーでは、人類が共通に受けている大恩をもたらした恩人の系列を**「伝統」**と呼びます。それは次の３種類です。

第１は、親祖先など家庭における恩人の系列(**家の伝統**)。第２は、国家社会の恩人の系列(**国の伝統**)。第３は、私たちの精神を導いてきた精神生活上の恩人の系列(**精神伝統**)です。これら家庭、国家社会、精神生活の恩人の系列は、万物を生成化育する宇宙自然の働きを代々継承してきました。モラロジーでは、これら「伝統」に対して尊敬と感謝の心を抱き、その恩恵に報いるとともに、みずから伝統の生き方に学び、最高道徳を実行することを**「伝統報恩の原理」**と呼んでいます。

このほかにも、私たちは社会生活や学校、職場などの日常生活において、また地域社会や国際社会において、大小さまざまな恩恵を受けています。このような恩恵を授けてくれる恩人は、３つの伝統に準じて尊重する対象として**「準伝統」**と呼びます。

人類は、これら諸伝統から、知識、文化、社会の制度、物財などを含め、いのちの存続と社会の発展を支えるさまざまな善を受け継ぎ、それをさらに育て、後世に譲り渡す営みを途切れることなく積み重ねてきました。

伝統報恩の原理は、世代をつなぐ倫理道徳として、これらの人類的な課題に取り組み、新しい秩序をつくるための重要な指針となるものです。

２．伝統に対する報恩の方法

恩恵に感謝し、それに報いていくためには段階があります。第１は、みずからが多くの恩恵に支えられて生かされていることを認識すること（**知恩**）。第２に、そうした恩恵のありがたさを感じ、感謝の気持ちを持って受け止めること（**感恩**）です。第３は、それらの多くの恩恵に対してなんらかの形で報いていこうと考え、行動に移すこと（**報恩**）です。

私たちは、自分のあずかり知らないところで与えられている恩恵にはなかなか気づくことができず、当たり前のものとして見過ごしてしまいがちです。諸伝統の大恩を正しく受け止め、その恩恵に報いていく行為は、大変重要な道徳の実践です。

報恩には、過去、現在、未来にそれぞれの対象があります。

①祖先や恩人の霊を慰める祭祀を執り行うなどして、私たちを育ててくれた人々の恩恵に深く感謝すること。

②万物を生成化育する働きの継承者として恩人を尊敬し、安心していただけるよう、自分もまた万物生成化育の働きに参画すること。

③人類社会の善の継承が途切れないように、将来世代の育成に献身することです。

このように祖先や先人、現存の恩人、そして子孫や後進など、次世代の人々にまで及ぶことになり、その感謝と報恩のエネルギーによって、いのちの永続が可能になります。

各伝統に対する報恩の具体的な心づかいについて見てみましょう。

家の伝統への報恩は、①祖先の大恩に感謝し、今度は私たちが受け継いで、祖先に安心していただくこと。②現存する親に安心としていただくこと（つねに親の心を推し量り報連相する）。夫婦は、互いの親祖先の恩恵があることを自覚し、互敬と慈愛の心をもって尊重しあい、仲睦まじい家庭を築くこと。③家庭の中で子や孫を育て上げること。神仏と親祖先に対する感謝報恩の精神を基本に、家の伝統から受け継いだ慈愛の心を伝え、生きる力を育て、社会に貢献できる人間に育てあげることです。

国の伝統への報恩とは、建国以来、国の伝統の系列が代々実行してきた道徳的行為を、国民一人ひとりが感謝と敬愛の念を持って受け止め、それぞれの立場で国家の存続と発展に貢献することです。

精神伝統への報恩とは、人類がよりよく生きるために生涯を捧げた諸聖人の苦労と、その精神を受け継いだ人々の道徳実行に対する感激から出発し、その思いや願いを受け継いで、よりよい社会づくりに貢献し、人心の開発救済に取り組むことです。

3．日本における国の伝統と精神伝統

日本においては、国と国民統合の象徴である天皇の系列が「国の伝統」にあたります。天皇と皇室は、国家の平安と国民の幸せを願い、国民と苦楽をともにする心を連綿と伝えてきました。

日本は、このような国民と苦楽をともにする国の伝統のもとに、国民がたがいの利害や立場、考え方の違いを超えてまとまり、内外の試練を乗り越えて豊かな文化を発達させてきた国柄であり、世界でも類まれな国といえましょう。

また、日本において国民道徳の中心を担ってきたのは、『古事記』や『日本書紀』などの古典に語られる天照大神をはじめ、皇室を中心として培われてきた道徳的精神であり、その意味で日本の皇室は、国の伝統であるとともに精神伝統でもあ

ります。その道徳的精神の核心は、ひと言で表せば大和心です。大和心は、聖徳太子の「十七条憲法」の冒頭「和を以て貴しと為す」に見られるように、和の精神を重んじるものです。その和と寛容の精神を受け継いで発展させ、今後の世界平和のために生かしていくことが、日本国民の大きな使命です。

4．伝統報恩の効果

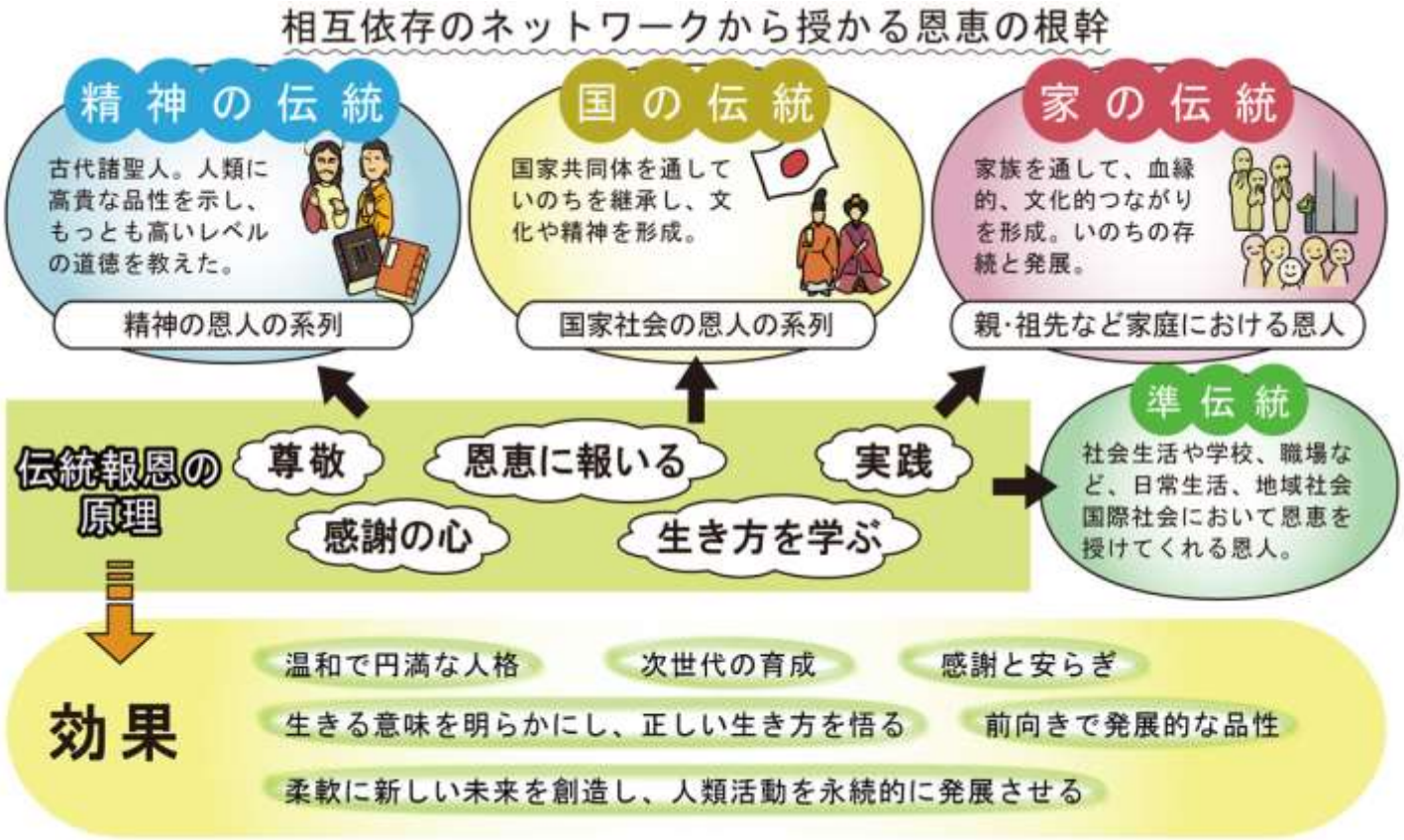
伝統の大恩に気づき、報恩することによって、私たちは、自分自身と所属する共同体の生命力や精神力を強め、創造力を伸ばすことができます。

伝統の偉大な道徳上の苦労と喜びの体験に学ぶならば、物事の本末、大小、軽重を明確に判断でき、その対応の方法を見誤ることはありません。

伝統報恩の実践によって、生きる意味や正しい生き方を悟り、物事の全体への配慮が行き届いた温和で円満な人格が形づくられていきます。伝統報恩の精神は次世代の育成を助けます。新世代と旧世代がともに伝統報恩の精神を持てば、急激な変革から生じる無秩序や混乱を最小限にとどめて、創造的な改革を推進することができます。

伝統報恩は、けっして古いものをかたくなに守ろうとする後ろ向きな生き方ではありません。古来の善きものを生かしながら柔軟に新しい未来を創造し、善を実現する活動を永続的に発展させる鍵であり、これによって、個人の安心と幸福を実現し、国家社会の秩序と発展をもたらすことができるのです。

この意味で伝統報恩は、最高道徳実行の核心といえます。



第９章　人心の開発救済

１．人心の開発救済とは何か

人心とは、私たち人間の精神のことであり、自分と相手と第三者の三方の精神を含みます。人心の開発とは、人間を知情意の各方面から秩序的、根本的に啓発し、自己中心的になりやすい心の傾向を深く反省し、道徳心を引き出すことです。また人心の救済とは、開発によって引き出された道徳心を、公平無私な慈悲心にまで高めることです。

開発から救済へと人格を根本的に立て替えて、私たちの精神が慈悲心で満たされたとき、何事も感謝の心で受け止める姿勢ができ、つねに安心と喜びを持って品性完成への道、安心立命の境地へと歩むことができるようになります。

人心開発救済の基本は、第１に、自分自身が諸聖人の最高道徳に学び、品性を完成することの重要性を深く理解することです。

第２に、諸聖人の精神と安心立命の境地を学び、その事績から感化を受けることです。

第３に、最高道徳の精神を他人に移植するための方法を学び、それを実行することです。

慈悲の心で他者の幸せを祈りながら開発救済に努めることによって、自分自身の品性が向上し、真に安心の境地へと導かれていきます。

他者の開発救済に努めることは、自分が開発救済されることであり、自己の開発救済と他者の開発救済とは一体となって進むものです。

人心開発救済の歩みを続けることで、私たちの物事に取り組む態度は積極的、建設的になり、運命を立て替える力を得ることができます。

２．人心開発救済の方法

人心の開発救済は、まず、自己自身が最高道徳の実行を通じて、正義と公平の精神を培い、寛大な心、慈悲の心を育むことです。そして、いたわりの心、あたたかい心で他者に働きかけていきます。

他者への働きかけは、もっとも身近な存在である家族から始めます。毎日、あいさつなど短い言葉を交わすときにもつねに家族の健康と幸せを願う、祈りの心で行うことです。

さらに、自分が道徳を実行して得られた喜びを、家族以外にも１人でも多くの人に伝え、最高道徳の精神を移植することに努めるのです。

人心の開発救済は、最高道徳の精神で相手の理性、感性、良心のすべてに働きかけます。

第１は、相手の理性に働きかけて、道徳実行の意義を理解してもらうことです。

第２は、相手の感性に働きかけることです。あたたかい慈悲の精神による献身的な働きかけによって、相手の道徳的心情を引き出します。

第３は、相手の良心に訴えることです。自分の道徳実行の生命を吹き込み、相手に感化を与えて実行への意欲を呼び起こします。

人心の開発救済は、まず、共同学習で切磋琢磨し合って、最高道徳を正しく学ぶことが基本です。その上に、相手の幸せを祈りながら親しく対話し、交流する中で、人格的感化によって、より深い気づきが生まれるのです。また相手の心に変化と成長が生じることを念じ、時間をかけて粘り強く働きかけます。こうして働きかけた相手が、やがてみずから他者の幸せのために人心の開発救済に取り組み始めたとき、無上の喜びを得ることができます。

人心の開発救済において大切なことは、共感的態度で相手に接することです。たとえば、病気で苦しんでいる人、困難な問題を背負って人生を送る人に対しては、その苦悩を自分のことのように受け止めるのです。人心開発の根本精神は、慈悲と尊敬と祈りにあります。これはカウンセリングの精神にも通じます。相手の苦悩を共感的、受容的に受け止め、相手の立ち直りをともに喜ぶ共感共苦の心で接するのです。

人心の開発救済の精神は、職場環境や労資関係の改善、社会の公益を促進する各種ボランティア活動への参加、人類の幸福に役立つ学問の研究、医療や科学技術の発展、地球環境の保全に努めるなど、さまざまな社会的な実践活動においても生かすことができます。

３．人心救済と人生の意味の回復

人生の途上で、私たちはたくさんの悩みや苦しみに出遭います。現代の日本社会は経済の成長にかげりが見え、社会の先行きが不透明な中で、だれもが未来に対して漠然とした不安や閉塞感を感じています。

自分が生きていく意味が見出せないときに、悩みや苦しみは、より深まります。自己の存在の意味や価値に対する根源的なときに心がさいなまれること、これが**「スピリチュアル・ペイン（魂の痛み）」**と呼ばれる苦しみです。誰もが出遭う可能性のある苦しみに対してどう対処していくかは、現代における重要な倫理道徳

の課題です。

医療や福祉の現場では、苦悩を乗り越えて生きる意味を見いだすためのケアのあり方が課題となっています。がん患者などに対する緩和ケアを含めて、心のやすらぎや生きがいをもたらそうとするケアを**「スピリチュアル・ケア」**と名づけています。

スピリチュアル・ケアは、相手との深い人格的な交流を通じてのみ行うことができるものです。自分もまた同じ苦悩を抱える弱さを持った存在であることを自覚し、相手の苦しみをわがことのように感じ取る共感共苦の心で寄り添うのです。

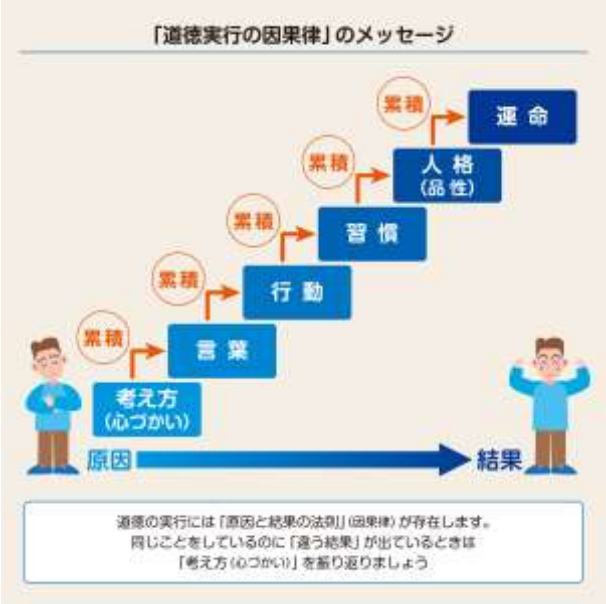
4．人心開発救済の効果

人心開発救済は、押しつけによる教導ではなく、対話や教育による感化という、おだやかな方法によるもので、その特質は、実行する人自身が深く開発され、救済されるところです。相手がどのような人でも、神仏が生み育てたいのちであると考えれば、疎んじて排斥することもなくなり、言動を不快に感じることも不平に思うこともなく、慈悲の心で接することができるようになります。そのとき、自身が品性の完成に近づいていくのです。

救済された人は、宇宙自然の働きによって生かされている存在であることを悟り、たとえ災厄や不慮の事故に直面しても、神仏が与えた恩寵的試練として感謝して受け止めることができるようになります。このように、人心の開発救済は、個人の生きがいと幸福を実現するとともに、人類社会に善をもたらす根源の力であり、人間としての**「最高の善事」**です。

第 10 章　道徳実行の因果律

1．道徳実行の因果律の理解



私たちは、日々、自他の行いがどのような結果を生むかを予測しながら生活しています。ところが、心づかいの重要性と道徳実行に関する因果律について、正しく理解していないことが多いのです。道徳実行の因果律の存在を確信できれば、私たちは、自分自身の心づかいと行いに明確な指針を持つことができます。モラロジーでは「持久微善を積んで撓まず」として、小さな善行を累積することを推奨しています。最高道徳の実行は、そのような状況を回避するための予防という側面もあり、その確実な実行のためには因果律の確信が必要不可欠です。

古代の諸聖人（孔子、釈迦、ソクラテス、イエス）は、道徳実行の因果律について、多くのわかりやすい教訓を残しています。「すべてよい木はよい実を結び、悪い木は悪い実を結びます（新約聖書より）」「子いわく、その以ってする所を視、その由る所を観、その安んずる所を察するときは、人いずくんぞかくさんや、人いずくんぞかくさんや（論語より）」「善を積むの家には、必ず余慶あり。不善を積むの家には、必ず余殃あり（易経）」

日本古来の神道の思想にも、道徳実行の因果律を重視する内容が含まれています。「大祓詞」は、人間の病気や災難、不幸の原因を人間の精神における罪や穢れにあると考え、そのよこしまな心を神に謝罪して改心を誓うものです。精神を神の心に一致するように祓い清めれば、おのずと健康になり、幸福になるという思想です。

これらの思想に共通しているのは、人間の道徳的な精神が、私たちの人生に大きな影響を与えるという考え方です。善い心づかいの積み重ねは、善い結果を生み、悪い心づかいは悪い結果につながるという因果律の考え方は、古今東西、多くの人々の間に受け継がれ、生き方の指針となっています。

2．現代科学から見た因果律

人間の心づかいは、身体に大きな影響を及ぼします。心身症の治療には、心が病をつくり、心が病を治すという面があることを示しています。

また、ポジティブ心理学の研究によれば、誠実性、愛、優しさ、赦し、感謝、希望などの心のあたたかな働きは、人生の満足度や幸福感を増して、健康や長寿をもたらすことが報告されています。

進化生物学では、人間の思いやりや親切などの利他的行動が、人類進化の過程で形づくられたことを示していますし、脳科学では、他者に対する共感性を示す脳細胞や道徳的な思考を担うネットワークの研究が進められています。

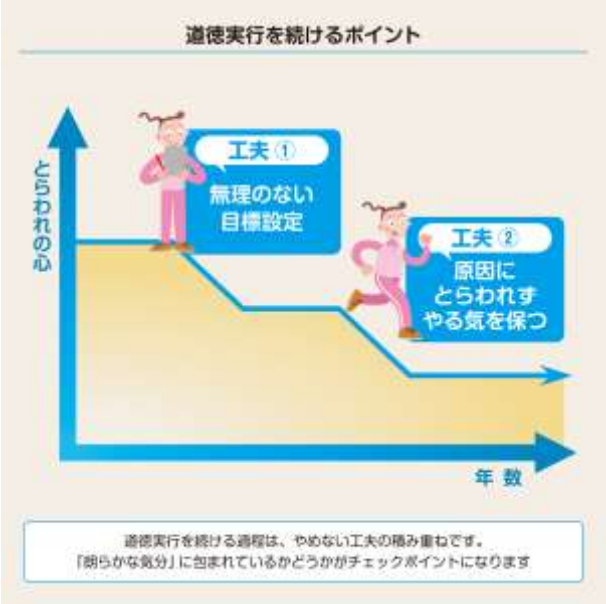
これらは、直接的に道徳実行の因果律を証明するものではありませんが、総合人間学の構築のために必要な知見です。

また、社会学的研究では、愛は愛を生み、憎悪は憎悪を生むことが明らかにされています。今日、一企業だけでなく国家レベルにおいても、道徳性がその繁栄と衰亡を左右すると考えられています。国家財政の破綻や世界恐慌なども、個人的、団体的、国家的および国際的な次元での倫理道徳の不完全さに由来するものと見ることができます。

企業の永続的発展は、経営者と従業員の道徳性や、その経営方針の倫理性が大きく影響しています。企業永続の鍵は、企業活動の道徳性にあるといえます。モラロジーでは道徳と経済は一体であるとして**「道経一体経営」**を提唱しています。

3．運命を改善する心構え

科学的な安心立命



道徳実行の因果律を理解したうえで、道徳実行による品性の向上を求める生き方こそ、安心や幸福を得るためのもっとも確実で有効な方法です。これを確信することが、科学的安心立命の生き方です。道徳実行の因果律を確信し、最高道徳の実行を決意して、希望を持ってみずからの心づかいを改善していくならば、不幸や困難をも乗り越えて、安心で幸福な人生を築くことができるのです。もちろん、現実には思いがけない出来事に遭遇することや、原因が明確であっても、取り返しのつかない状況に陥る場合もあります。

このようなときには、**「原因を追わず善後を図る」**ことです。

唯心的な安心立命

人生の途上には、不慮の事故や事件、あるいは重い病気や治療方法が確立していない難病など大きな困難に直面することがあります。このような場合には、科学的安心立命による解決は難しく、唯心的安心立命という自覚に立つほかありません。まず、これまでの生き方を深く省みて、その境遇を自分の運命として受け止めるのです。

「自ら運命の責めを負うて感謝す」の心境になったとき、その困難に正面から取り組んでいく覚悟を持つことができます。**「恩寵的試練」**として受け止めるのです。

つまり、唯心的安心立命とは、遭遇した困難を宇宙自然や神仏の愛と深い配慮の賜物として受け取り、自分の至誠慈悲の限りを尽くして人心の開発救済に取り組み、自分の品性を根本に改善して新境地を開こうとする、不退転の決意です。

人生や運命を立て直す鍵は、ほかでもない私たち自身の日常の心づかいと行いの改善にあります。道徳実行の因果律を確信し、最高道徳を実行していけば、生きる意味を再発見し、生きがいのある生活と未来への希望を得ることができます。

個人の日々の生活や仕事においては、実り豊かな出会いが増え、たとえ困難に出遭っても、その意味の転換を図ることで、与えられた可能性を余すことなく開拓できるようになります。また、家族や地域社会、国家という集団においては、その存続や発展が確実となり、人類の安心、幸福と世界平和の実現に貢献することができるのです。

最高道徳実行のすすめ

最高道徳を実行するときには、動機・目的・条件などを正しく認識し、実行の方法にも工夫をしてこそ、確実に実行の効果が現れます。

最高道徳の実行にあたっては、まず、普通道徳の形式や慣習を尊重し、それに最高道徳の精神を込めて実行することです。

次に、一人ひとりの自覚にもとづいて行うものです。最高道徳の大切さを自覚した人自身が、みずから率先して実行していくことです。

それでも、孔子が「徳は弧ならず、必ず隣あり」と述べているように、決して孤立することなく、必ず親しい仲間や理解者ができ、安心と喜びの人生が開けてきます。

最高道徳実行の動機は、「義務先行」で見たように、過失に対する贖罪と恩恵に対する感謝報恩の精神にもとづいています。何事においても、成功や幸福を直接の目的とするのではなく、品性の完成を目的として努力し、結果はその品性の向上に伴って自然に与えられるものと考えるのです。

実行にあたっては、時代や時機、場所、場合などの条件にも配慮することが大切です。社会はつねに変化し続けるものですから、道徳の実行方法も、時代に伴って進化させることが求められます。

また、物事への対応には臨機応変さが必要です。よい結果が現れない場合は、みずからの配慮や取り組みに不十分な点がなかったかと反省し、時機や場合が適当であったかを点検することが大切です。

モラロジーを学び、最高道徳の価値を理解していても、その実行は難しいと思えるものです。しかし、最高道徳実行の根本は心づかいにありますから、いつでも、どこでも、だれでも実行することができるのです。道徳実行の因果律の存在を確信し、最高道徳の実行を日々累積していけば、徐々に品性を高めて、**「天爵を修める」**「天に宝を積む」こととなり、その結果として、真に生きがいのある人生を築くことができるのです。

最高道徳はその実行をもって生命となす

【お問合せ】
公益財団法人モラロジー道徳教育財団 青年育成課
Tel：04－7173－3312
e-mail：seinen@moralogy.jp
（R6.2.11）

イラスト　Naoko Yamaguchi